

---

# リトルバスターズ！～あの日の約束～

まあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リトルバスターズ！～あの日の約束～

### 【Nコード】

N3064T

### 【作者名】

まあ

### 【あらすじ】

バス事故の1年後、神北小毬の幼なじみ『水瀬優夜』は事故に遭い、目を覚ますとそこはバス事故が起きる前だった。優夜はこのやさしい世界で何を思い進んで行くのでしょうか？そして、事故を知る優夜は……自サイト『悠久に舞う桜』でも執筆中です。

## プロローグ

あの日の事故から、1年後。

(……1年か)

『水瀬優夜』は神北家と刻まれた墓の前で手を合わせる。

(……どうして、こうなった？ 何故、あいつが死ななくてはならなかった？)

あの日、クラスメートが乗ったバスが事故に遭い。

旅行に不参加だった優夜と『来ヶ谷唯胡』。奇跡的に『直枝理樹』、『棗鈴』の4人が生き残った。

(……俺は、あの人と約束したはずなのに、何もしてやる事が出来なかった)

優夜の胸に残るのは後悔。

大好きだった幼なじみの兄さんとの約束を守れなかった事

好きだった筈なのに近くにいる事が恥ずかしくて疎遠になったしまった幼なじみへの想い

(……女々しいな。あいつを突き放してしまった。俺になんてこんな事を考える資格なんてないはずなのに)

あの日、もし、俺が旅行に参加していたら……あいつの近くにいる事が出来ていたら

(……俺はあいつを『小毬』を助ける事が出来たのかな?)

考えても仕方ない事を思ってしまう。

(……また来るよ。小毬)

優夜は幼馴染の墓を背に歩きだす。

(さてと、バイトか……めんどくせえが。あの部屋にいるよりはいいか)

優夜は現在、あの事故の生き残りである理樹と同室だがあの事故の影響か理樹は笑う事も無く、部屋は重苦しい空気を放っている。

(……俺が言えた義理でも無いがな。どうにかならないかな? ん!?)

横断歩道で止まり考え事をしている優夜を追い越し小さな男の子が走り抜ける。

……信号は赤である。

(あのガキ、洒落にならないぞ)

優夜が男の子に気づいた時、男の子の姿を確認できなかったのか、車が減速もせずに走って来るのを見て、優夜は駆け出す。

（間に合えよ……）

男の子が車に撥ねられる瞬間、優夜は男の子を突き飛ばすが……

（……俺は何をやってるんだ？）

優夜の耳には男の子の泣声や野次馬達の騒ぎ声が聞こえる。

（……これは、罰かな？）

『あの日の約束』を守れなかった事への……

薄れてゆく意識の中、優夜は思う。

（まあ、いいか……これで俺……も、あいつ……もと……い……ける……かな？）

## オリキャラデータ

ミナセユウヤ  
水瀬優夜

### 備考

神北小毬の幼馴染。中学入った頃から優夜が小毬を意識して来たせいか関係が疎遠になる。事故の前は謙吾と同室。事故が起きた後は理樹と同室だが理樹とは特に仲が良いわけではない。性格はクールで無愛想。笑っている姿を見ている者は少ないとまで言われているため、態度が悪いと風紀委員から注意を受ける事が多く佳奈多とは顔見知り。今は止めてしまっているが空手と柔道の有段者で格闘マニア。成績は特に良いわけではないが数学は好きなようで数学だけは得意だが担当教師と折り合いが悪く数学の時間は結湖と一緒にサボっている姿が確認されている。

## 第1話

目覚ましのアラーム音が聞こえる。

（もう朝かよ……変な夢を見たな。まさか自分が死ぬ夢を見るなんてな……あれ？）

優夜は欠伸をしながら目覚まし時計を止め、2段ベッドの1階から降りようとした時にある違和感に気付く。

（……何で、こんなに天井が近いんだ？　って、何で、俺は2階で寝てるんだ？）

状況を確認するのに考え込むがいまいち、状況が把握できない。

（……一まず、降りるか）

優夜はベッドから降りるとドアが開き、

「ん！？　水瀬、今日はずいぶんと早いな」

ドアから自主トレーニングをしていたのかタオルで汗を拭きながら『宮沢謙吾』が入ってくる。

「……宮沢？　お前がどうしてここにいる？」

「寝ボケてるのか？　俺とお前は同室だろ。顔でも洗ってきたらどうだ？」

優夜は1年前のバス事故で死んだはずの謙吾がいる事に驚きの声をあげるが謙吾は優夜が寝ボケていると思ったようで顔を洗って来いと言い、

（どう言う事だ……あの夢は事実で、俺は死んでいて、ここは死後の世界？ そんなバカな事があるのか？）

優夜は目の前で起きている事に頭が付いて行かないようで眉間にしわを寄せていると、

「俺は朝飯に行くが、水瀬はどうする？」

「俺も行くかな？」

謙吾は汗の処理を終えたようので朝食を食べに行くと言い、優夜は今の世界の事を確認したいと思い食堂に謙吾の誘いにのるが、

「珍しいな」

「……たまにはいいだろ？」

「そうだな」

謙吾は優夜が自分の誘いに乗った事に驚きの表情をするが直ぐに表情を元に戻し、2人で食堂まで歩くと『井ノ原真人』が待ち構えており、

（こいつ等は大丈夫か？）

「ちょ、ちょっと、真人も謙吾も止めてよ!？」

何故か謙吾と戦い始め、野次馬が集まってだし遅れて食堂にきた『直枝理樹』が2人を止めようとするが止まらなく、

「宮沢、井ノ原。ここで騒ぐな。飯に埃が付く」

「「邪魔をするな!!」」

優夜は見えていられなくなったようであまり息を吐きながら2人を止めにはいるが2人から怒声が浴びせられ、

(……何か頭にくるな)

野次馬からは『水瀬も参戦か?』と言った言葉が飛び買い始める。

「水瀬君、止めるのを手伝ってくれるの?」

「直枝、手伝うが……どうなっても怒るなよ」

「えっ? どう言う?……」

理樹の言葉を最後まで聞かずに優夜は真人のみぞおちに右拳をねじ込み、バックステップをして真人から少し距離を取ると膝が落ちた真人の顔に回し蹴りを放ち、真人は優夜の攻撃に崩れ落ちると、

『嘘だろ!?! あの時ノ原をたつた2発かよ』

野次馬達から優夜の強さに対して驚愕の声上がる。

「……次は、お前だな」

「……水瀬。お前とやる理由がないんだが」

優夜は真人の事など気にかける事もなく、謙吾に向かい次はお前だと言つと謙吾は優夜と戦う理由はないと言つが、

「俺にはある」

「何だ？」

「……飯に埃が舞つた」

「そんな……」

優夜は謙吾の言葉を遮ると一瞬で謙吾の懷に飛び込み、

「……死ね」

ボディにフックを決めた後、落ちてきた顎にアッパーを放ち、

「…直枝、バカはほつというて飯食つて学校行くぞ」

「う、うん」

「何でこいつら、寝てるんだ？」

2人を葬り去つた後、口を開け呆けてる理樹に朝食を済ませようと言い、2人で会話もなく朝食を食べ始めると『棗鈴』が朝食を持って合流するが優夜の姿を見るなり、

「ふかー」

優夜を威嚇する。

(……何故、威嚇する？ ……猫みたいだな)

「鈴。落ち着いて」

「理樹。こいつは誰だ？」

優夜は鈴の様子に眉間にしわを寄せると理樹は鈴を落ち着かせようと声をかけ、鈴は理樹の後ろに隠れながら優夜の事を聞き、優夜はその様子に転がっている謙吾を指差し、

「……水瀬優夜。このルームメイトだ。後、話した事はないとは言え、クラスメイトなんだ。名前くらいは覚えておいてくれ」

「……」

自分の名前を名乗るが鈴は警戒を解く事なく、優夜は理樹や鈴より先に朝食を食べ終えたため、帰ろうとすると優夜が残したゼリーを鈴が見てるのに気づき、

「棗。これやる」

「いいのか？」

「俺は食わないからやる」

「すまない。お前、いい奴だな」

「……………気にするな」

鈴の前にゼリーを置くと鈴は目を輝かせ優夜にお礼を言い、優夜は着替えるために寮に戻って行く。

## 第2話

（ここは何なんだろう？ 過去みたいだけど……過去って割には記憶にない事が多すぎる。それに何かに監視されてるような違和感。まるでこの世界が箱庭のような。それなのに……すっかりバイトは入ってるし。後、可笑しいのは……）

優夜は教室の自分の席に座り、聞こえてくる教師の声を気にする事なく、自分の今の状況を確認すると制服のポケットにある鍵を握り締める。

（……過去だとしたら、俺はこれを持っている訳がない。これを持っていると言う事は1年前の事故は確かに存在していたはずだ）

優夜が手に握っている鍵は屋上の鍵。

クラスメートを失い空を見上げる事が多くなった優夜を氣遣い<sup>いま</sup>現実の担任が預けてくれたもの。

（他に可笑しいのは……俺が知る限り、宮沢と井ノ原は棗兄が居ないとケンカはしなかった。これはあいつ等が守り続けてるルールだったはず……ん？ 棗兄？ そう言えば見て無いな。どこにいるんだ？）

優夜はいつも騒ぎが起きる中心にいるはずの『棗恭介』が今朝の騒ぎに現れなかった事に首を傾げた時、4時間目終了の鐘が鳴り響き、教師は授業を終えると教室を出て行く。

（……一先ずは学食に行くか。朝飯を食ったせいか腹の虫が元気だ

な)

優夜の腹の虫が小さな悲鳴を上げたようで優夜は苦笑いを浮かべて席を立とうとした時、

「待てよ。水瀬」

真人が優夜を呼び止める。

「……何だ？　くだらない事なら聞かないぞ」

「今朝の事で話がある」

「……今朝？　何かあったか？」

「てめえ、忘れたとは言わせね……」

優夜は真人など眼中にないとぼけると真人は優夜につかみかかるうとするが、

「お前、五月蠅い」

真人の言葉を遮り、鈴のハイキックが真人を襲う。

(相変わらずキレのいい蹴りだが……訳がわからんな)

2人の度付き合いを後ろに教室を出て学食に向かったのだが、真人がしつこく向かって来るため、優夜は真人を沈め、購買でパンを買い屋上へ向かうと

(……アリクイか?)

屋上へぬける窓に引っ掛かっている人の姿があり、優夜はスカートの中身を確認した後、屋上へと続くドアの前に置いてある机をよけるとポケットの中にある鍵でドアを開け、

「神北、それ楽しいか?」

「ふえ!?! ゆ、優く……水瀬君」

窓に引っ掛かっている幼なじみ『神北小毬』の名前を呼ぶと小毬は驚きの声を上げた後、優夜の顔を見て慌てて呼び直す。

(そう言えば、再会した時に恥ずかしいから優って呼ぶなって言っ  
たな)

優夜は小毬の様子に苦笑いを浮かべると、

「別に優でも良い」

「……ホント?」

小毬に向かい、昔の呼び方でかまわないと言うと小毬は呆気に取られたようできょとした表情をし、

「それで、楽しいか?」

「た、楽しく無いよ。助けてよ」

「ああ」

優夜は表情を元に戻すと改めて嵌っている小毬を見て助けるかと確認をすると小毬は目に涙を浮かべ、優夜は変わらない小毬の姿に苦笑いを浮かべると小毬に手を伸ばす。

K o m a r i ' s   s i d e   v i e w

（どうしよう？ …… 太ったのかな？ 最近、お菓子の量が多かったし……）

ドライバーで窓を開けて屋上に出ようとしたのだが小毬は窓に引っ掛かってしまう。

（誰か来ないかな？ …… ダメだよ。こんな姿見せられないよ）

その時、後ろで何かを動かしている音が聞こえ、しばらくすると屋上のドアが開く音がする。

（生活指導の先生だったらどうしよう？ …… ここで見つかったら、ここにこれなくなるよ）

小毬は生活指導の先生に見つかった時の場合を考えていらぬ心配始め出すと、

「神北、それ楽しいか？」

小毬の耳に懐かしい声が聞こえる。その声は中学で再会したがあまり話す事のなくなってしまった幼なじみ『水瀬優夜』の声であり、

「ふえ！？ ゆ、優く…… 水瀬君」

小毬はとっさの事で子供の頃に読んでいた呼び方で優夜を呼ぼうとするが、再会した時に、『優君』と呼び怒られた事を思いだし、

（怒られる）

そう思い身体をこわばらせるが優夜は自分の姿がおかしいのか苦笑いを浮かべ、

「別に優でも良い」

「……ホント？」

優夜は子供のころを同じように優しい声で昔と同じ呼び方で良いと言い、小毬は驚いたような表情をすると、

「それで、楽しいか？」

「た、楽しく無いよ。助けてよ」

「ああ」

優夜は小毬に助けるかと聞くと小毬は優夜に助けを求め、優夜は小毬の様子に苦笑いを浮かべて小毬を窓から助ける。

### 第3話

「……ねえ。優君」

「何だ？」

「あのね……見た？」

優夜は小毬を助けると現実の世界でいつも座っていた場所に座り、購買で買ってきたパンの袋をあけると小毬が横に座ると自分のスカートの中身を優夜に見られたか気になるように優夜に聞くと、

「……ご馳走様でした」

「ふええええ！？ お、お願い忘れて」

「……アリクイか」

「い、言わないで！？ もう、お嫁貰えなくなるよ」

優夜は小毬の下着を思い出しながらつぶやくと小毬は慌てて優夜に忘れるように言うがその言葉はどこか外れており、

「いや、お前が貰うとしたら婿だろ」

「そうだけど、あのね……見なかった事にしよう……おっけー？」

「ああ」

優夜は小毬の言葉に冷静にツッコミを入れると小毬は1度、深呼吸をして優夜を指差して忘れてくれと言うと優夜は頷き、

「見られなかった事にしよう」

「アリクイをか？」

「止めて。言わないで。お嫁にも行けなくなるよ」

優夜が頷くのを見て小毬は自分自身を指差して忘れようと誓おうとするが優夜はイタズラな笑みを浮かべて小毬に茶々を入れると小毬は顔を真っ赤にして慌て始める。

「そんな事も無いだろ……中を見られたなら別だが」

「中？ ……」

優夜は下着ぐらいで気にするなと言うが優夜の言葉で小毬の顔はさらに赤みをおびて行き、

（相変わらず、いい反応だな）

優夜は小毬の顔を見てくすりと笑うと、

「ゆ、優君のエッチ、スケベ、変態……！」

「良いか。男は全部そうだ……俺も今日の夜に神北のアリクイを思い出して……流石にアリクイじゃ無理だな。そうだな……まあ、太ももとかもすっかりと堪能させて貰ったからな」

「ダメー！？ お、おかしいな想像をしないで！？」

小毬は顔を真っ赤にしたまま優夜を非難するが優夜は小毬をからかうのが楽しくなってきたようで小毬をからかうと小毬は泣きそうになりはじめ、

「冗談だ」

「優君、意地悪だよ」

「……悪かったな」

優夜は冗談だと言うと小毬は頬を膨らませ、優夜は小毬をからかった事を謝り、パンを食べ始める。

「ねえ、優君？」

「今度は何だ？」

小毬は優夜がパンを食べ始めるともう1度、優夜の名前を呼び、優夜が聞き返すと、

「どうして、屋上の鍵を持ってるの？」

「……別に良いだろ」

「よく無いよ」

小毬は優夜が鍵で屋上のドアを開けた事を非難するような目で見て聞くがその目はどこか羨ましそうであり、

「ひょっとして、欲しいのか？」

「ほ、欲しくなんてないよ」

優夜は小毬に鍵を見せびらかして聞くと小毬は慌てて否定すると、

「そうか。欲しいなら、合鍵を作ってやろうと思ったんだけどな。悪い。変な事を聞いた」

「……合鍵？」

「まあ、これからもドライバーで窓を外して窓に嵌ったりしながら屋上に出てくれ……その度にアリクイやらアルマジロやらを誰かに見せてな」

「何で、知ってるの!？」

優夜は小毬をからかうように素直になれば合鍵を作ってやっても良いと言うと小毬は心を惹かれており、優夜は素直にならない小毬に冗談混じりでまた窓に嵌って誰かに下着を見せてくれと言うと小毬は驚きの声を上げる。

## 第4話

「……アルマジロもあるのか」

「わっ、考えないで、想像しないで」

優夜は小毬の反応にため息を吐くと小毬は慌てて優夜に想像しないでほしいと言つと、

「……頼む。もっと、年にあつたのをはいてくれ」

「どうして？ 可愛いよ」

優夜は流石にアルマジロには興奮しないようで小毬に年に合ったものはいてくれと言つが小毬は優夜の言葉の意味がわからずに首を傾げる。

「そっちの方が見た時に嬉しいだろ……脱がしがいもあるし」

「脱がしがい？ ……止めてよぉ。ホントにお嫁に行けなくなるよ  
お」

優夜は小毬をからかうように笑うと小毬は優夜の言葉にしばし考えた後、涙を瞳に溜めながら言つと、

「大丈夫だ」

「何が？」

「その時は俺が貰ってやる」

「ふええええええ！！？？？」

優夜はさらにと小毬を嫁に貰うと言い、小毬は優夜の言葉に少し沈黙するが頭が追いついたようであつて顔を真っ赤にしながらか驚きの声を上げ、

「だ、だ、だ、だって、優君。私だよ。優君は無愛想だけどカッコいいから陰でファンクラブだってあるのに」

慌てて優夜の言葉が信じられないと言い、

（……そんなもんがあるのかよ。ここで知る新事実か？ それとも俺の妄想か？）

慌てる小毬を眺めて優夜は小毬から聞かされた自分のファンクラブと言うものに眉間にしわを寄せるとこの世界の事を考え始める。

（……俺が知る限りの学校の関係者はここにいるようだ…… 棗兄  
 がいないがこれは後で宮沢か直枝にでも聞けば良いか。後は学校外  
 も見てこないといけない…… それより、今は小毬か？）

一先ず、考えるのを止め慌てている小毬を見て苦笑いを浮かべ、

「……お前、ガキの頃は俺と結婚するような事を言ってたんだから別に良いだろ」

「そ、そうだけど」

「それとも、俺じゃ不満か？」

小毬の耳元でささやくと小毬は昔の事を思い出したようで顔を赤くして優夜の顔を見上げ、優夜は真つ直ぐに彼女の瞳を見つめて自分では小毬の相手になれないかと聞くと、

「ふ、  
ふえええええ  
!!!???」

小毬の頭は限界を超えたようで「ボン」と言う音を立てて頭から煙が出たような気がした。

（……やり過ぎたか？ まあ、今はこの世界が何かわからないし、他を見ながら小毬と一緒に居よう）

昔、自分が手を離してしまった時を取り戻すかのように、

(……この仮初めの時間をいっとなととも)

例え、この世界が夢だとしても……

あの日の現実が夢であるように祈ろう。

（それが今の俺が出来る事……逃げてるだけかも知れないが）

この少女を守る。

それが、  
『あの日の約束』だから……

『あのひととの約束』だから……

優夜はあの日の約束を改めて胸に刻むと、

「小毬」

「ふえ！？」

小毬を呼ぶと小毬は驚きの声を上げる。

「それはおいおい考えろ……それで、合鍵だけど、どうする？  
いるなら、今日、鍵屋に行つて来るが」

「欲しいです！！」

優夜は小毬に別に答えは直ぐにいらないうと小毬に合鍵が欲しいかと改めて聞くと小毬は直ぐに返事をし、

「そうか。なら、明日か明後日に渡す」

「ありがとう……優君」

「ん？」

優夜は頷くと立ち上がり、屋上を後にしようとする。

「また、後でね」

「ああ」

小毬は優夜と普通に話せるように戻ったのが嬉しいのか笑顔で優夜に声をかけ、優夜はその言葉に笑顔を見せた後、屋上を後にする。

## 第5話

(……バイトって気分でもないんだけどな。ここが何かを調べるために学園以外も見えてこないといけないからな)

「水瀬？ 何をしているのかしら？」

優夜は放課後になるとバイトへ行くために指定の駐輪場からバイクを出していると『二木佳奈多』が優夜の姿を見つけて声をかけてくる。

「……二木か。見たままだ。今日はバイトだからな。バイク出してるんだよ」

「風紀委員長の私の前で？」

優夜は佳奈多を見てバイトに行くと言うと佳奈多は風紀委員のためかバイトやバイクにあまり良い印象を持っていないようで眉間にしわを寄せながら言っと、

「……別に禁止されて無いだろ。俺はバイクもバイトも申請をきちんとしてるんだ。申請せずに無断でやってるならまだしもお前に睨まれる意味がわからないよ」

「……そうだけど、やっぱり、バイクは事故とか起こすとドライバ―は」

優夜は自分は申請して許可を貰っていると言うが佳奈多は事故を心配しているようで不安そうな表情をする。

「運転には気を付けてる……事故は見たくもないし、もう遭いたくもないからな」

「……そう。気をつけてよ。あなたがバイトに行く途中で事故を起こしたら、バイトもバイクも規制される可能性もあるのよ」

優夜は佳奈多の心配に安全運転を心がけていると言うと自分がこの世界にきたきっかけの事故を思い出したようで苦笑いを浮かべると佳奈多は彼女なりに優夜に気をつけるように言つと、

「……お前が俺を心配するなんて珍しいな」

「……流石に知り合いが死ぬのは遠慮したいわ」

「それもそうだな」

優夜は佳奈多が自分を心配する事が珍しいと言うと佳奈多は当然だと言いたげに呟き優夜はそんな佳奈多の態度に苦笑いを浮かべてバイクにまたがりヘルメットを被ろうとした時、

「優君、待つてよお」

後ろから小毬が走って来るのが見える。

「……優君？」

「俺だろっな」

佳奈多は聞きなれない言葉に首を傾げると優夜は自分の事だと言い、

「そうなの？」

「水瀬優夜。お前、俺のフルネームを知らなかったのか」

優夜は佳奈多に自分のフルネームを言うと、

「……そう、それで神北さんとは」

「幼なじみだ」

「聞いた事無かったわね」

優夜は佳奈多に小毬との関係を話すと佳奈多は小さく頷き、

「別に言って回るもんでも無いだろ」

「それもそうね」

優夜は別に言って回る事ではないと言うと佳奈多は優夜の言葉に頷く。

（……あれ？ こいつも事故の後、俺と同じように何か大切な人を亡くしたみたいだったよな。確か『ハルカ』って言ってたよな？

……こいつにそんなに仲の良い友人がいたか？）

「水瀬、私、行くわね。そろそろ、見回りの時間だから」

「……ああ」

優夜は佳奈多を見て、自分の中にあるバス事故の遺体置場を思い出したように考え込むと佳奈多は風紀委員の仕事があると言い、優夜は頷いて佳奈多を見送ると、

「ゆ、優君」

「まずは息を整えろ。待っててやるから」

「う、うん……」

小毬は走って来たせいか肩で息をしており、優夜は小毬の様子に苦笑いを浮かべると小毬に息を整えるように言い小毬は頷く。

「優君、バイクで商店街まで行くんだよね？」

「ああ」

「それなら、私も乗せてって」

しばらく、小毬を待っていると小毬は息が整って来たように優夜の行き先を聞き、優夜は頷くと小毬は後ろに乗せて欲しいと言い、

「別にかまわないが、俺はバイトもあるから帰りは知らないぞ」

「まあ。それは仕方ないよ」

「…そうか」

優夜は小毬に予備のヘルメットを渡すと小毬はシートの後ろに座り優夜の腰を掴み、

「手を離すなよ」

「うん」

優夜は小毬に手を離さないように言つとバイクを走らせる。

## 第6話

「ほら、降りろ」

「……………うん」

優夜は商店街に到着すると小毬にバイクから降りるように言うが小毬はバイクに酔ったようで具合の悪そうな顔をしており、

「……………まさか、酔ったのか？」

「そうみたい……………気持ち悪い」

優夜は小毬の様子にため息を吐くと小毬は消えそうな声で気持ち悪いと言い、

「吐くなよ……………一先ず、店まで連れてくか？ ……あんまり、バイト先を知られたく無いんだけどな。もう少し、我慢しろよ」

「う、うん……………」

優夜は小毬にもう少し我慢しろと言うとバイト先の駐車場までバイクを走らせる。

「こんにちは」

「……………お邪魔します」

『水瀬君、早いね……………彼女？』

優夜は小毬を支えながらバイト先の喫茶店のドアを開けると店主は優夜と小毬を見比べた後、小毬を指差しながら優夜に小毬との関係を聞くと、

「違います。幼なじみです。ちょっと、バイクの後ろに乗ったら酔ったみたいで少し休ませてやって下さい」

『いいよ。何か、さっぱりとしたもの用意するから、水瀬君の奢りで』

優夜は店主の言葉にため息を吐くと小毬の状態を話し、店主は頷くと小毬に飲ませるものを優夜のバイト料から引いて出すと用意はじめ、

「俺の奢りですか？」

『ここは男の子が奢るべきでしょ。水瀬君の運転が荒いから彼女は酔ったわけだし』

「……わかりましたよ」

優夜は眉間にしわを寄せるが店主は気にする事なく、優夜に責任があると言い、優夜は納得がいかなさそうに頷き、

「優君。いいの？」

「ああ……マスター、俺はバイト前にちょっと用事あるんで、こいつの様子見て下さい」

『いいけど、ついでにここによってカップ回収してきて』

小毬は優夜に悪い事をしてる気がするようで優夜を見上げて言うと優夜は頷いた後、店主に小毬の事を頼むと喫茶店を出て行こうとするが店主は優夜を引き留めると優夜にメモ紙を渡し、

「了解しました。ちょっと、行つてきます」

『行つてらっしゃい』

優夜はメモ紙を受け取ると店を出て行き、

（さてと、まずは鍵屋によつてからカップの回収か？ 後は学園以外でおかしな点は無いか見ないとな……マスターは変わらなかったが）

優夜は鍵屋に合鍵の依頼をしに行くと店主から受け取ったメモ紙を見てカップの回収をして行く。

（特におかしいところはないか？ 街並みも活気も変わらないかな？ つて考えるとここは何なんだ？ ……過去とは違うが、よく本とかである平行世界つてヤツか？ ……でも、それも違う気がする。朝起きた時から感じる違和感、誰かに見られてるような視線。これが消えない。これが気のせいでないとしたら俺はなぜここにいる？ 事故のショックで作り出したのか？ それとも……）

ナニカニヨバレタカ？

（仮に呼ばれたとしたら何のために？ 現実を変えるため？ そんな事があり得るのか？）

ナニヲカエルノ？

（何を変える？ あいつを助けるため？）

ココニハアノコガイルヨ。ソレジャアダメナノ？

（……ダメなのか？）

ドウセモトノセカイニモドレテモコマリハイナイヨ。

（……そう、小毬はあの事故で）

アノコガイルンダカラココデイイジャナイカ。

ココデハアノコハワラツテクレルヨ。

アノヒカラメヲソラシツツケタママ。

その言葉が頭に浮かんだ時、優夜の心臓が大きく跳ねる。

(……小毬は拓也さんを忘れたまま?)

優夜はあの日から身につけ続けている小毬の兄の形見分けに貰った首飾りを握り締める。

(ここの小毬はどうなんだ? 現実と同じで忘れたままなのか?)

病気で亡くした兄の事を、

(そうだとしたら……俺はあいつに何をしてやればいい?)

ここが仮に優夜が思い描いた。

シアワセノユメヲグゲンカシタモノナラバ

(俺はあいつと拓也さんから目を逸らし続ける事になる? 何かの意思によりここに連れ込まれたならそれは何のためだ? ……拓也さん、俺はどうしたらいい?)

優夜は考え込むが考えがまとまるはずもなく、

(……そろそろ、時間だな。戻るか)

優夜は今の表情を小毬に見せるわけにはいかないと思ったように大きく首を振った後、バイト先の喫茶店に向かい歩き出す。

## 第7話

「……なんだ。これは？」

「ゆ、優君、お、おかえりなさい」

優夜はバイト先に戻り、小毬の前には店で1番高いパフェと10点ほどのケーキが並んでおり、優夜はそれを見て唖然とするなか、小毬は優夜の顔を見て気まずそうに視線を逸らしながらも店で1番高いパフェを一口ほおぼり、

「……まずはスプーンをおけ」

「う、うん」

「……どう言う事だ？」

優夜は眉間にしわをよせると小毬に今の状況を説明するように言う  
と、

「……優君。怒ってる？」

「まず、どうしてこうなったかを話せ。怒るのはそれからだ」

「えーと」

小毬は優夜が眉間にしわを寄せているのを見て怒られると思いながらも優夜にまずは今の状況を説明する。

「最初は飲み物だけだったけど、メニューを見てるうちに食べたくなったと」

「う、うん」

優夜は小毬の説明にため息を吐くと小毬は気まずそうに頷き、

「せめて、量を考えてくれ。人の奢りだと言っても限度があるだろ」

「ごめんなさい」

優夜は怒るのを通り越して呆れたようで肩を落とすと小毬は申し訳なさそうに謝り、

「だいたい、食える量じゃないんだから、マスターも止めて下さい」

『せつかくの売り上げ何だから止めるわけがないだろ』

優夜は店長をジト目で見るが店長は苦笑いを浮かべ、バイトなら売上に貢献しろと言い、

「……食えない分は持ち帰りにしますんで、それくらいの融通はきかせて下さい」

『わかってるって』

優夜は店長の様子にため息を吐くと小毬をそれ以上は責める事なく、店長と話をまとめると、

「優君、怒って無いの?」



小毬は店長の言葉に少し考えて、返事をする、

『じゃあ。これ、エプロンね。手はしっかりと洗ってね』

「はい」

店長は小毬にエプロンを渡し、小毬は笑顔で受け取るが、

(……こけるな。間違いなく)

優夜は2人の様子に不安しか感じないよう、ため息を吐き、

「俺は知りませんが、責任はマスター持ちで頼みますよ」

『どう言う意味?』

「まあ、気にしないで下さい」

優夜はこの後に小毬がするであろう失敗のフォーローを考えてもう一度ため息を吐くが店長は意味がわからないよう、首を傾げた時、

「はわわわわ!?!」

『……………失敗した?』

「さあ。知りませんよ……いらっしやいませ」

小毬は何もないところでひっくり返り、店長は苦笑いを浮かべるな

か、優夜はドアを開けたお客を席に案内する。

## 第8話

「ありがとう。優君」

「ああ。帰りは酔わなくて良かったな」

バイトを終えてバイクで寮まで戻ってくると、

「さてと、このケーキどうする？」

「食べないの？」

優夜は駐輪場にバイクをしまいながら、小毬が注文してあまったケーキ以外に廃棄前のケーキをお土産に貰ったため、かなり量があるケーキを見て苦笑いを浮かべるが小毬は楽しみにしているようで首を傾げる。

「食うけどこの量は2人じゃ食えないだろ？ 廃棄前だから賞味期限がないからな。でも、捨てるのは勿体無い」

「そうだね。どうしようか？」

「ん？ 優夜少年に……神北女子？ 珍しい組み合わせだな。逢引か？」

2人でケーキをどうするか考えていると『来ヶ谷唯湖』が声をかけてくると、

「……来ヶ谷か？」

「で、逢引か？」

「ち、違うよ」

優夜は面倒な事になりそうな気がして眉間にしわを寄せるが唯湖は小毬が慌てて否定するため、新しいおもちゃを見つけた子供のように笑う。

「バイト先で廃棄前のケーキを貰ったんだが、量が多くてな。どうしようかと話をしていたんだ」

「優夜少年のバイト先のケーキか？ チーズケーキはあるのか？」

「うん」

優夜は唯湖にケーキの事を話すと唯湖の視線は鋭くなり、チーズケーキがあるかと聞くと小毬は頷き、

「来ヶ谷、ケーキの代わりに紅茶淹れろ」

「わっはっは、そう来るか。流石は優夜少年だ。それで、場所はど  
うする？」

優夜は唯湖にケーキの代わりに紅茶を淹れて欲しいと言うと唯湖は楽しそうに笑いながら、場所をどこにするかと聞くと、

「そうだな。女子寮に入るわけにはいかなからな。男子寮の方が  
少し規制は緩いし、俺の部屋で良いか。宮沢達に食わせれば捨てず  
に済むだろ」

「それだと、私だけ不公平じゃないか？」

優夜は自分の部屋で良いと言うと唯湖は自分以外に何もしないでケ  
ーキにあり付く人間が出る事に不平を漏らし始め、

「……俺が淹れれば良いんだろ」

「うむ。それで良い。と言う事だが、神北女史は問題ないか？」

「う、うん」

優夜はため息を吐くと唯湖は笑顔で頷いて小毬にも優夜の部屋で良  
いかと聞くと小毬は優夜と唯湖の様子に何か思ふ事があるのか1歩  
引いて返事をする。

「どうした？」

「2人はどう言ったご関係で？」

優夜は小毬の様子に首を傾げると小毬は優夜と唯湖の関係を勘違い  
しているようで遠慮がちに聞き、

「どんな関係に見える？」

「……私、帰る」

唯湖は小毬の反応に楽しそうに優夜の腕に抱きつき、小毬は肩を落  
として1人で女子寮に戻ろうとすると、

「……来ヶ谷。くだらない事は止める。あいつをからかうなら他の事の方が面白い」

「ほう。例えばどんなのが？」

「そうだな。今日の昼休みに……」

「それは言わないでえ」

優夜はため息を吐きながら、唯湖に抱きつかれている腕を引き抜くと小毬をからかうなら他の方法が面白いと言って昼に小毬にあった時の事を話そうとすると小毬は慌てて引き返してくるため、

「なるほど、確かにこちらの方が見ていて楽しいな」

唯湖は慌てる小毬の姿を見て楽しそうに笑い、

「一応、言っておくが、来ヶ谷はバイト先の常連で、神北は……」

「優夜少年の恋人だな」

「ち、違っよ!？」

優夜は小毬に唯湖との関係を話し、唯湖には小毬は幼なじみだと言おうとするが唯湖は小毬をからかいに移り、小毬は顔を真っ赤にして優夜は彼氏ではないと言う。

「俺は弄ばれてるんだ」

「これで、なかなかの女豹な訳だな」

「そう言う事だ」

「ち、違っつてば」

優夜は唯湖の冗談にのっかり、唯湖は楽しそうに笑うが小毬は慌て否定している。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3064t/>

---

リトルバスターズ！～あの日の約束～

2011年10月7日15時14分発行